

# 青鳥文庫



試作版

Ver.1.00



## 離縁

柳隆盛

「離婚して」

突然聞こえてきた声に、私の手はネクタイに掛けられたまま暫し止まった。

ゆっくりとネクタイを外す。ハンガーに引つ掛けると次にワイシャツのボタンを外した。上着は既にハンガーに掛けられて力なくぶら下がっている。

美也子は、廊下からじつとこちらを見詰めていた。

思い詰めたような、吹っ切れたような眼だった。私は、大きく息をついた。今日も体は疲れきっている。もう一仕事だと思ふことにした。

「どうした、いきなり？」

シャツを脱ぎながら私は言った。とにかく背広を早く脱いでしまいたかった。これがある限り、仕事を終えて家に帰ってきた気にはなれない。

返事が来るまでに、私はズボンも脱いでハンガーへと掛けた。クローゼットの下の引き出しから、

上下揃いのスウェットを取り出す。

美也子は、じつとこちらを見詰めるだけでもう何も話そうとしない。

私はもう一度息をついた。

「分かった。まず落ち着いて話をしよう。居間でいいかな？」

美也子が頷く。その細い髪が揺れた。いつの間にか、その髪にも白い物が多くなっている。目尻や口元に控えめに寄った小皺はむしろ愛らしい。

私の髪にもまた白いものが多くなっている。それだけでなく、頭頂が薄くなってきた。そうやって、互いに老いていくのだと思ってきた。

違ったのかもしれない。美也子が求めていたのはもっと華やかなモノなのかもしれない。それは幾度も考えてきた。しかし、いまさら他のやり方も知らなかった。今も昔も、私はそんなに器用な男ではなかった。

廊下が、妙に長い。手も汗ばんでいる。自分は、焦っているのか。離婚とはなんなのだ。胸が熱くなる。というよりむしろ、胃が引つ繰り返ったようだった。なんなのだ。何かあったとして、なぜいきなり今日なのだ。昨日まで何時も通りだったではないか。本当は違ったのか。本当に何時も通りだったのか。しかし何が違ったのか。なぜ、いきなり離婚なのか。

居間につくまで、美也子は口を開こうとしなかった。明るい木目に澗が茶色く塗られたテーブル。美也子が向かいの椅子に座る。

それでも、愛してきたつもりだった。もう二十年。それだけの時の中で様々なことがあり、色々なものが曖昧になった。言葉にして何かを確認したことはない。言葉にして何かを語ったこともない。するものではないだろうとさえ思ってきた。

しかし、ずっと愛してきた。その言葉が、首元まで出かかった。しかし、そこから伸びてくることはなかった。言葉は、ただ言葉だ。しかしその言葉を、いや言葉は言葉に過ぎない。

様々な思考が慌ただしく頭の中を巡った。どれも、この事態を解決するどころか説明するに足る物ですらなかった。幾ら考えようとそんな物だけが思い浮かぶだけだった。

「疲れたの」

呟くように美也子が言った。それだけか。しかし言葉はやはり出てこなかった。

「そうか」

私はただ、それだけを口にした。

美也子の目が一瞬燃えるように私を見据えた。私はただ、じっとそれを見詰め返した。美也子はやがて目を逸らし、俯き、それから頷いた。

何に頼いたのか。待ってくれ。その思いが頭を過ぎった。静電気でも走ったようにぴくりと体が動いた。しかし、引き止める手には何の力もなかった。腕は微動だにも動かない。沈黙が永遠に続くようだった。私はただ美也子を見詰め続ける事しかできなかった。

美也子は静かに俯き続けている。やがて、堪えかねたようにカバンの中からクリアファイルを取り出した。中に入っていたのは離婚届だった。

ペンと、判子も同じカバンから出て来た。既に私の名前と判子を書くだけでよいようになっている。「書いて」

立っていた。座っていられなくなったのだ。美也子はじっとこちらを見詰めている。私は台所の冷蔵庫を開け、少し迷って、四本の缶ビールを取り出した。

「少し、やらないか」

美也子は、ビールの本数を見て頼いたようだ。ただ、何かを堪えているような感じは伝わってきた。冷静でいようとしているのだろう。私も、そうだった。

いっそぶつかってしまえば良いのかもしれない。怒鳴りあつて、泣き出すぐらいの方が良いのかもしれない。それで通じるものもきっとあるだろう。しかし、そうしないのはもはや意地だった。結婚した二十年は意地の張り合いだったという気もした。疲れたとは、それに疲れたということなのか。

ぶつけてくれれば良かった。ぶつかってくれれば良かった。今が、その時なのか。別れると、本気で考えてきているのか。しかし目の前の婚約届けの文字に迷った形跡はない。それが、最後の意地なのか。

どちらともなくタブを開けた。アルミが拉げ、中の炭酸が漏れる音。幾度も聞いてきた。当然のように、そこに何の感慨もなかった。なのに、不思議と何時もと違う音のような気がした。流し込むように、私は一缶を飲み干した。美也子もそうやっている。乾杯はしなかった。

酒の飲み比べも、意地のようなものだ。付き合ったのも、思い出してみれば意地みたいなものだったかもしれない。

ビール缶を握りつぶす。二人して息をついた。昔は、何本いけるかも競い合った。その数は何時も一緒だった。時には私が美也子に、時には美也子が私に合わせた。そうして何かを確かめていたのかも知れない。二本目は中々開かない。

私は、ゆっくりと、二本目を開けた。美也子はまだ開けようとしなない。ちびりと舐めるように飲んだ。渋みとも苦みとも言えない嫌なものが、口の中にじゅわりと広がっていった。苦いだけだと、そう思えた。美也子はまだタブを開かない。

その次には、私はもう離婚届に名前を書いて判子を押していた。二本目を飲み干す。美也子の目の

前に置かれた缶も取り、三本目を開けた。

何で胃が引つ繰り返ろうとしているのかもはや分からなかった。幾ら飲んでも酔える気がしなかった。なぜなのだ、と思う。

過ぎていたのだ。二本目を開けたとき、一口目をちびりとししか飲めなかったとき、ぶつかり合う時はとうに過ぎていたのだとしか思えなくなつた。

飲み干した三本目の缶を私は壁に叩きつけた。音は一瞬だけ居間を支配しただけで、すぐに何かに押し流されていった。なぜなのだ。なぜだ。

四本目を取りに行く力はなかった。項垂れた。美也子が立ち上がる。離婚届を取ろうとした手を私は掴んでいた。待て。待つてくれ。また、声には出なかった。

「離して」

美也子と言う。眉にも白いものが増え、皺がよつて、染みも浮きだし、新築のマイホームももんだんと馴染んで、古くなって、そうやって老いていく。それが。

なぜなんだ。疲れたとは、なんなのだ。あまりに、勝手ではないか。理不尽ではないか。

「……離して」

離していた。離婚届がクリアファイルに仕舞われていく。結婚とは、なんなのだ。あんな紙一枚、



あんな紙一枚でなかったことになってしまふのか。二十年。そんなものなのか。

違っていた。同じ紙きれでも、結婚届は違っていた筈だ。人生の幸せとも言うべき物がともにあつた。暮らしに不自由はなかった。仕事も安定している。二人の關係が、特に悪かつたとも思えない。年に一度か二度、一緒に行く旅行。それぐらいの遊びもあつた。家にいる時間も多かつた方だろう。何かで遅くなつても、埋め合わせはしてきたつもりだつた。

数年経つて、そんなことも習慣化して、そしてさらに十数年が経つた。それは、幸せなのではなかつたのか。私の幸せではあつた。それは、私の幸せでしかなかつたのか。美也子の幸せとは一体何だつたのか。何も言わないのは、受けているのだと思つていた。違つたのか。ずっと訴えていたのか。言葉ではなく、何かで訴えていたのか。

冷蔵庫に入つていた酒を、全部取り出した。洗い場の下の戸棚を開けると、ツナ缶もあつた。氣付くと、朝になつていた。

目の前に美也子が立つていた。きちつとした服に着替えている。十は、若返つたように見えた。不意にどうしようもなく置いて行かれる様な氣がして、私は腰を上げた。視界がぐらりと揺らいた。テーブルに手を付いて私はようやく自分を支えた。吐き氣が込み上げてきて、そのまま嘔吐した。視界が滲み、それでも私は食い入るようにして美也子を見詰め続けた。

美也子は眉間の皺の一つも、動かさなかった。

「行ってくるわ」

何処にだ。呟いたが、声にはならなかった。口の中に残る酸いモノを吐き出し、ゆっくりと息を吸った。気怠いと言うより、全身の感覚が緩慢だった。一瞬だけだ。足は、しっかりと地に掴んでいる。酔いなど吐けばケロリと治った。十年前は、治った。

「何処に行く」

美也子は答えなかった。答えなど、分かりきっていた。

見つめ合う。これが本当に最後なのだと分かった。言葉になど意味はない。しかし妻が行こうとする。喉まで出かかった言葉が、染み出すようにして溢れた。

「ずっと、愛していた。……愛してる」

酷く、小さく弱い声だった。語尾は震えてすらいいた。

半歩だけ、美也子が振り返る。その眼は、怒りでも悲しみでもなく、ただ静謐だった。

ふっと、その眼に光が灯った。愛情のような、哀れみのような光だと思った。

「私もよ」

それきりだった。沈黙が、沈黙になる間もなかった。私は頷きも、返事も出来なかった。

妻が、美也子が歩き出す。私はじつとその背中を見詰め続けた。それきりだった。

やはり言葉に意味など無いのか。

沈黙が、部屋を幾重にも不気味な物にさせていた。冷蔵庫の排気音が、換気扇のファンの回る音が、耳に鳴り続けている。部屋中の壁が、迫ってくるようでもあった。

酔いなど、とうに覚めていた。

「美也子っ」

駆け出す、己のゲロに足を滑らせ、それでも駆けた。裸足のまま、ドアにぶち当たるようにして玄関を出る。もしかしたら、という思いがあった。

「行くな、美也子っ！」

しかし、美也子はいなかった。やはり、とうにそれきりなど過ぎていた。

横道をバイクが音を立てて走り去り、雀が鳴いて、お隣が道路に水を撒いて、どこからか竿だけ屋の音が聞こえてきて。こんなものか、と私は呟いた。

「……こんなものなのか」

赤い車が、目の前を走りすぎていく。

こんなものだ、と言われた気がした。

## 夢幻

柳隆盛

「御本を、沢山読まれてゐるのね。」

彼女は、私の部屋を一瞥しただけでそふ言つた。無論であつた。

私の、三畳一間のこの小部屋には、本と、本を収めるための棚と、それから物書き用の文机一台しかなゐのだ。

「実は……。」

私はどぎまぎした。まるで、告白をする初な学生のやふな有様であつた。それでも、私は言つた（でなければ、一体何のために四苦八苦して彼女を引つ張つてきたのか）。

「実は、本などを出したいくて沢山読んでゐるのですが、中々まなりません。」

「まあ。どれほど、お読みになつたの？」

彼女は驚ひたことに、あまり驚ひてもない風であつた。ご存知なのだ、と私は直感した。全てご存知で、私をからかつておられるのだ。

それでも、不思議と悪い気はしなかつた。それでこそなのだ、とすら私は思つた。だからこそなのだ。「さあ。そろそろ、五百にもなるかと思ひますが、数えたことはありません。ままなりません。」

嘘であつた。本当は、四百と五十三冊である。近頃では、偉ぶつてロシアの何とか言ふ文豪の、六百頁もある非常に分厚い本を読んだ。けれども、読んだだけでちつとも面白くなかつたし、何も分からなかつた。てんでお手上げであつた。

しかしまつたく、こんな所でも、私の病氣は現れる。彼女は、全てを承知しているやうに、ただ、「まあ。」

とだけ言つた。とても可愛らしかつた。私は一目惚れをした。いや、もふ一目所ではないのだけれど、私は改めて、彼女に一目惚れしたのだ。こんな事を言ふと、あなたは私を馬鹿にされるかもしれない。だがどうぞ、存分にするが良ひ。恋を知らぬとは、可哀相な人だ。私は、じつと貴方の眼を見て、その冷えた手を私の手で温めながらでさえ、そふ言へる。

私は幸せであつた。私でないものは不幸せであるとさえ思えた。それは愚かでも何でもなく、今たつたこの時をにおいてはそれが唯一無二の眞実だと疑わなかつたし、事実そふであつた。とにかく、私はこの時までには確かに幸せであつた。

「では、さぞ沢山、書いてらしてゐるのでせうね。」

私は、またどきりとした。けれどもこれは、これまでにない程のどきりであつた。しかもあろふことか、背中に汗の流れる類のどきりであつた。

私は慌てて、けれど一音一音はつきりと、むしろ普段より低いぐらゐの声で、

「無論ですとも。」

と言つた。私は私の中で深く頭を抱えた（書く、書いているだと。一体何を！）。とはいへ、一部ではそれもまた真実であつた。私は読んだ本と同じか、あるいはそれ以上、事実書いてきたのである。事実書いてきたのであるが、そのどれも、たとえ三枚に満たない小編であつてすら、ただの一度たりとも、いわゆる物語には付き物な終わりといふ字を書いたことがなかつたのである。最後まで、きちんと終わらせたことがなかつたのである。それは、私にとつては一行も書かぬのと同じであつたし、事実同じ価値しか持たなかつた。むしろ、真つ白ひ原稿用紙を黒く染めてしまつていただけ、いつそう無価値ですらあつた。

すると、彼女は微笑を浮かべ、今度はこふ言ふのである。その口が蠱惑に歪む前から私はその正体を知つていた。ああ、私が悪かつた。出ていつてくれ。早く、この部屋から出て行つてくれ。もはや私には、その慟哭を叫ばずにいるだけで精一杯であつた。

「ではあの、もし不都合がなければ、あの、こんな事を言ふのはとても失礼であるのかも知れませんが、

見せてもらつても宜しぬでせうか？」

焦がれている人にこんな事を言われて、否と言える奴は男ではない。私はけれど、ウンともイイエとも言はず、ただ黙つて文机に収まつている引き出しからそれでも一番マシだと思へるものを抜き出して黙つて彼女に手渡した。その手は震えていた。とても酸っぱいものが這ひ上がつてきて、吹き出しそふになつた。

けれど彼女はその一切に気付かぬ振りをして、

「では、失礼致します。」

と、ニコリと笑つた。私は死にたくなつた。この世に生まれ落ちたことを深く後悔した。彼女の瞳が次の行に移るためびくりと動く度、その白い陶磁のやふな手が頁を捲る度、私は己の何か大切なかがへのないものを抉られてゆく様な気がして、私はついに立つてゐることすら出来なくなり、ぺたりとその場に座り込んだ。それにも気付かぬ風に、彼女は立つたまま私の作品とも呼べぬ習字の練習帳のやふなものの頁を捲り続けた。

ああ、と私は呻いた。逃げ道を探して、私は外に面した一枚の窓を見つけた。これは僥倖、まさに思し召しである。私は彼女に気付かれぬやふそろりそろりと畳の上をコオロギか何か虫のやふに移動してついぞその縁に手をかけることに成功した。その時であつた。

「あの、何をなさつていらつしやるの？」

私はじヨコンと歐羅巴のブリキ人形のやふに立ち上がり、

「いやなに、今日は暑い。風でも入れたらどふかと思ひましてね。あ、そふだ。早く座つてください。ああ何を案山子のやふに立つているのです。さあ、早くこの座布団に。早く。」

と自分でも失礼なことを言ひながら（彼女を立たせたままにしたのは私である）部屋に唯一の座布団を差し出してしきりにそれを叩いてすら見せた。結局、窓は開かなかつた。今日は、むしろ肌寒いぐらいの様子であつた。だが、さすがは彼女である。

「ええ、どうもありがとう。」

と何食わぬ顔でそふ言ひ切ると、実に優雅な挙措で正座をして見せ、それに見惚れている私に気付ひてか気付くまいか、さつさと私の出した原稿用紙に視線を落とした。私はまう、一体どふすれば良ひか分からなかつた。途方に暮れてしまつたのである。

私は、ああもうどふにでもなれと開き直り、それからをぼつと過ごした。ぐつたりと本棚の骨に寄りかかり、ただ彼女を視姦した。そふすることではか、もはや自分を慰める術はなかつたのである。それに、これは何よりも彼女の名譽のために言つておくが、視姦といふ言葉を使ふのがあるいは不適切である程にそれは実に可愛いらしひ他愛のなぬものであつた。あるいは風景や、あるいは花にそふ



するやふに、私はただ見惚れていた。よふは、もう私には何もかも分からぬのだ。ただ、茎のやふに  
しなやかな彼女に椿の和服は実に似合っていた。

彼女はゆつくりと私が手渡した全ての頁を読み切ると、全てを整えて丁寧に二度畳を叩いて高さま  
で揃え、あるふことかまた初めから読み始めてしまった。私は流石にもふ勘弁ならぬ、これ以上は心  
臓が止まつてしまふと奮起して、

「その、どうでしたか。」

と何とも月並みにこふ聞いた。

彼女ははつと思ひ出したやふに私を見て、それから自分のしよふとしていた罪に気付いたらしく、  
一度俯いてからゆつくりと顔を上げ、

「その、続きはおありになるのでせうか。あの、とても氣になつてしまつて何とか答えはなぬものかし  
らともう一度。お恥すかしぬ。」

つまりはそれが答えであつた。私は舞い上がつて立ち上がり、それから氣絶したやふに倒れてみせて、  
更にむくりと起き上がると彼女の手から原稿を引つたり、文机の一番上の引き出しから真っ白い原  
稿用紙を取り出して

「今書きます。」

とすら言つてみせた。それからあまり憶えていない。ふと気付くと私は俯せて眠つていて、原稿にべつたりと涎を垂らしていた。そして私は直感した。その考えはさながら天啓のやふに私を駆け巡つて飽くなかつた。つまりは、夢だつたのだ。全て幻だつたのだ。

私はのつそりと原稿用紙から顔を上げ、その題を見た。「夢幻」とあつた。なんといふ皮肉だろうと私は幾度とも知れず天を憎んだ。

それから着物の裾で涎を吸い取り、その夢幻とやらをばらばらと捲つてみた。驚いたことに、この夢幻は完結してゐた。その時には私はもう妙に嬉しくなり、すつくと立ち上がり、またその夢幻の原稿をばらばらと捲つた。草臥れた文字で、確かに終わりと書いてある。確かに私の字である。

その時であつた。

はらりと毛布が私の肩から落ちた。それはこの部屋にはあるはずのない毛布であつた。はて、誰が持つてきたのであるふ。今日は、いやもふ一年もこの家には誰もゐなはずなのだ。それに、妙に良ひ香りがする。これは、私の大好きなみそ汁の匂いだ。しかもこの匂いには、余所の食卓の匂ひとは決して違ふ迫力とも言ふべき正直さがあつた。私は再び、まさかと思つて部屋を飛び出そうして、取り落とした夢幻の原稿用紙に足を滑らせ、無様にも転んで見せた。

私は、はつと眼を醒ました。目の前には夢幻の原稿用紙があつた。無論、何処を探しても終わりの

文字など皆目見当たらなかつた。ただ汚らしい涎と、奇妙にのたくつた黒い虫が原稿用紙を漂つてゐた。私はそれだけは奇妙に変はらぬ夢幻と言ふ題をしぼし見詰め、その紙屑をびりびりに破いて部屋中に撒き散らした。

しばらくして、私はのそのそと文机まで這つてゆき、真新しい原稿用紙を取り出してこの一本の短編を書いた。面白いとも、つまらなひとも思わなかつた。私はそれに、やはり「夢幻」と名付けた。ともあれ、記念すべき一本になつたことに違いあるまひ。なぜなら、……いや、やめておこふ。後書くのは一言だけである。

## 一の命

柳隆盛

雑踏の中。信号が赤から青に変わり、私は半ば無意識のうちに一步を踏み出していた。不意に、赤い物が眼の端を掠める。

赤い車。

ずっと遠くにあつたその車が、一切の遠慮も躊躇いも見せず疾駆している。

え、と思つた。信号は青い。なのに車はどんどん近づいてくる。

逃げるなければと本能が告げる。が遅い。咄嗟のことで理性が追いつかない。

車は止まるはずだと常識が反発する。纏まらない思考に体が混乱し足が繯れ、けれど、反射的になんとか踏み留まる。が、なによりもそれがいけなかった。

轟。

衝撃より、苦痛より、恐怖より、そら、空が見えた。そして浮遊感、それと驚愕。何が。轢かれたのか。誰が私？ まさか。

走りすぎていく空と赤い車。固い、地面の感触。驚きと焦り。

初めて体が痛みを叫んだ。苦しみが全身をのたうち回った。恐怖が視界を闇に染めた。

嘔み締めようとも、悲鳴を上げようとも、力の限り叫ぼうとも、何も柔らがない、助けはやってこない。こんなに辛いのになぜ意識が消えない。体が燃やされているように熱い。こんなに辛いのならばいつそ殺して欲しい。私を消して欲しい。憎い。早く、何よりも早く。

ずりずりとアスファルトの上を手が這う。憎らしくて手をアスファルトに叩きつける。しかし痛みも苦しみも恐怖も憎しみも何も柔らがない。

喘ぎ声が漏れた。気付けば全てが真つ暗だった。真つ暗な世界に、ゆらりと揺れるように一人の老婆が立っていた。その口元の皺が、まるで私を嘲笑っているかのように見える。

知っている。私はこの老婆を知っている。

憎しみを叫ぼうとした。燃えるような熱さを、少しでも吐き出そうとした。

老婆が、それを遮るように口を開く。

私は、飛び跳ねるように眼を覚ました。

何度吸つても、煙草は何の味もしなかった。ただ舌がピリピリして、苦々しい唾が口の中に溜まってくる。

吐き捨てられたガムで汚れたアスファルトの上に吸い殻を放り、革靴で何度も踏みつぶす。口の中には煙草の臭いが染みつき、その毒のような物が唾にも混ざっている気がして、耐えきれず何度も路上に唾を吐いた。

夕焼け。すっかり冷え切った風が、服の隙間から滑り込みごつそりと体温を盗んでいく。ポケットに手をつ込んだまま、微かに匂う風の香りに俺は僅かに身を震わせた。

舌打ちする。今年もいつの間にか、もう本格的な冬になろうとしている。

俺は、あのノドを焼く乾燥した空気と、全身を貫く強烈な疾走感を思い出していた。

一体だれが呼び始めたのか、地上を翔る男。それが俺の愛称だった時のことだ。

だがすぐに過去の熱さは時の寒気に晒されて空しさと若干の切なさにと取って代わられていく。

通りがかった電気屋の前で、思わず足を止め顔を蹙めた。

ショーウィンドウに飾られたテレビの中で、壮年の痩せ細った男が淡々とニュースを読み上げている。

マスコミは嫌いだった。他人の姿ばかりを映そうとして、自分を省みない馬鹿な奴らだ。それを聞いていたり顔で話をする奴らも同じである。

それぞれに勝手なことを言い合い、なにかあると過去も忘れてヒラリと手を返す。それがふざけた話でなくて、一体何だというのか。

ニュースの内容は隣の県で女が一人死んだというありふれた内容だった。轢き逃げで犯人はまだ捕まっていない。右下に映されたテロップに記されている女の年齢は、まだ若かった。

Ｌ市と言えば、ここからそう遠くない。

人が死んだというニュースを見ても、考えたのはこの程度のことだった。

今の世の中、人が死ぬなど大したことではないのかもしれない。子供を殺す親でさえ世間には溢れている。子供も、負けずとナイフを振り上げ家に火を放つ。

止めるべき世論はそれを同情や対外的に取り上げるが、その社会の義務を負えると他人事だと忘れまた別の事件を不幸だと囁く。

そしてそうされるだけ、世間には事件が溢れていく。殺人や誘拐にすら、流行という物があるのは新聞などを読まずとも明らかだった。

メディアは如何なる悲劇をも娯楽へと変える、という言葉もある。娯楽こそを聴衆は求めているからだ。

舌打ちした。振り返ることはしない。なんとなく、それは未練がましく思えて、そんな姿を見せる自分は癪だった。

草臥れてきた背広からもう一本煙草を取り出す。火を点けるでもなく、俺はなんとなくにそれを啜えた。

もう何社目だろうか。とにかく、何社目かの会社の面接を俺はまた落ちたのだった。

2

雑踏。周囲のビルが夕日で仄かに赤く染まっている。温かくはなく、少し肌寒いぐらいの十一月の夕暮れ。

何をするのか、何をしたいのか。とにかく道には人が溢れ、忙しく歩き続けている。

人混みは嫌いだ。そもそも、人を好いた事もない。そして、だから誰かが俺を好くこともないだろう。

路地を曲がり、アーケードのある商店街に入っていく。



面接のため背広姿だったが、一度家に帰って着替えてから外出するのは億劫だった。

今日の朝見たとき、冷蔵庫の中身は何とも寂しかったのを思い出す。中規模のスーパー。腕時計の針は五時を指している。今から行けば、タイムサービスにも間に合うだろう。

夕飯時であるから、店は混み合っていた。沈黙して果物だの野菜だのを黙々と眺めていくそれは不気味だ。白すぎる照明の光にぼうつと照らされて、さながら彷徨い歩く幽鬼のようにさえ見える。

一瞬だけ足を止め、入り口でかごを掴むと自分もその中の一人となった。

さてどうしたものか。カレーは先日食べたし、シチューはその前に食べた。肉を食いたい気分でもない。米はまだあった。後は缶詰と、簡単な野菜炒めで済ませよう。

親元を離れ、一人暮らしを初めてもう二年近くになる。僅かに届く仕送りは同情のつもりなのか、親としての責任でも感じているのか。

レジに並ぶ前、ふと卵も無かったなと思いだした。しかし確か、明日は特売日だった筈だ。今日一日ぐらい卵が無くてはどうにでもなる。

レジに並びながら、壁に貼られたチラシをそれとなく見つめた。

その道の帰り、いきなり後ろから声を掛けられた。

「おい、その餓鬼」

反射的に振り返る。その姿を見て、俺は渋々と握っていた拳を解いた。代わりに舌打ちをする。

いつの間にか癖になっているようだった。

そこにいたのは、酷い年寄りだった。

団子に纏められた、これ以上は無いほど白く色の落ちた髪。転んだだけでぼっくり逝ってしまいそうな姿。

声はすぐ耳元で聞こえた気がしたのに、その婆はパイプ椅子に腰掛けて、じつとこちらを見上げていた

前に置かれた白い机から垂れている紙には、墨か何かで預言師と書かれている。

「なんだ、婆さん」

「明日の朝、彼女を助けたければその交差点に行きな。行きたくなければそれも良い。行かない方が良いかもしれん」

言いながら、婆は骨と皮だけに思える指で目の前の交差点を指した。交差点にはひっきりなしに車が通り、信号待ちの人間がばらばらに並んでいる。三叉の、この辺りでは大きな交差点だった。

「さあもう用は済んだ、とつとと失せな。お代はいらないよ。くれるというなら貰うがね」

かつと頭に血が上った。手が動きそうになる。それは何とか抑える。相手は耄碌した婆さんだ。舌打ちをした。ふざけた婆さんだ。言っていることもまるで理解が出来なかった。

女を助けたければ、一体何のことだというのだ。

「いやだね、また人が死ぬ」

思わず振り返り、ぎよつとした。何処にも白い机も婆さんもいなかった。嫌に低く噎れていてぶるぶると震える婆の声を思い出し、少し背筋が寒くなった。

「おい、あんた。ここに預言師って書いた婆さんがいなかったか？」

近くの奴を掴まえてそう聞いた。浅い色の背広を着た男は、俺を一瞥すると言った。

「え、居なかったと思うけど」

「……そうかい」

ちつ、と舌打ちしその音に押されるように俺は家路を急いだ。

結局、なんだったというのだ。

アパートの錆びたドアを開ける。黴びた畳の匂いと、冷たい暗がりかぼつかりと目の前に拡がって僅かに鼻を震わせた。

いやだねえまた人が死ぬ。

老婆の、ひしゃげた声が甦ってくる。それを振り払うように、俺は無造作にネクタイを首から引き抜いた。

その晩、夢を見た。

ぼんやりと見える世界は直ぐに夢だと分かった。なのに、何故か現実のようにも思える。

雲が散らされた空は青く、地面のアスファルトはひんやりと堅く、空気が凍えているからだろうか。不思議なものだった。

そこは、どこかで見たような大きな通りだった。それもそのはずで、直ぐにあの老婆の指が示した交差点だと分かった。周りには誰もいない。自分がいるだけだ。

人っ子一人いない街は、何とも寂しい物だった。

何の音もしない。ただ風だけがそよそよと、一人寂しそうに肌の上を泳いでいる。他には、風に流されるような物すら何一つ無かった。

通りを少し右に辿るとこれまた大きな交差点に出る。駅に近いせいか、何時も路肩にタクシーが列を作り大量の車が走っているが、今はずっと道が続いているだけだ。

視界を遮る物がないと、こんなに広がったのかと思うほどの場所もだっ広がった。周りは何かのビルで囲まれていて、昼時にはさぞ混み合うことだろう。

その道の向こうで、何か赤い物が光った。そう思ったときは赤い点になり、耳を劈くエンジン音と共に徐々に大きくなってもうそれは体の横を通り過ぎていた。遅れて、力強く風が吹き抜けていく。何という車だったか、とにかくそれは真つ赤なスポーツカーだった。

無人の交差点の信号は青になっている。が、当然止まりはしないだろうと思った。ふざけた野郎だと思つたが、どうせ渡る者などいないのだ。

しかし、なぜか俺は同時に夕暮れのニュースを思い出していた。轢き逃げをするのだとしたら、ああいう奴なのだろうか。

車の先へと視線をずらし、俺は再びぎよつとした。

誰もいないはずのその先の横断歩道に、一人の女が立っていた。馬鹿な。当然のように車は止まらない。逃げる。思つたとき、鈍い音が跳ね上がり、女が強かにアスファルトの地面へと叩き付けられていた。何事もなかったように車は走り去っていく。

俺はその瞬間ふつと移動し、直ぐ真上から女を見下ろしていた。仰向けになって倒れている。

一体何が起つたのか。答えは明白だったが、妙に考えが纏まらない。分かるのは、ただ女が車に轢かれそしてたぶん死んだだろうと言うことだ。あとは、あの車の血のように赤い色だけが鮮明に目に焼き付いていた。

夢の中だからか、女に傷はなかった。ただ、仰向けで寝ているようにさえ見えた。

女は、綺麗な黒い髪をしていた。ロングヘア、すっきりとした鼻筋。ただ透き通るような眼だけが不気味に宙を見詰めている。

俺はしゃがみ、そっとその瞼を閉じてやった。不思議と、指先からは温かな感じが伝わってきた。OLだろうか。ぱりつとしたスーツとギャップがある、幼さの残る顔。おそらく俺とそう歳は変わらない、綺麗な女だった。

突然、閉じた彼女の眼が開かれた。その眼が刺すように俺を見詰める。何かを伝えようとするように、口が少しずつ開いていく。

俺は思わず後ろへと飛び退いていた。その時、俺は目が覚め、天井に浮いた染みを眺めていた。

「……なんなんだ、今の夢は」

不思議と言うよりも、不気味さが勝っていた。もしや、昼間のあれも本当は夢だったのか。思えば、確かに白昼夢のような物ではあった。

一度考えてしまうと、本当にそうだった気がして、俺はしばし狼狽えた。

しかし夢だとしたところで、所詮はただの夢だ。気にする事もない。

強引に布団をかぶり、時計を見るとまだ寝てから数時間しか経っていないかった。

さつさと寝てしまおう、と俺は思った。

明日の予定は、何もない。

女の口は、たすけてと動いたように思えてならなかった。

4

今日の気温は昨日よりもだいぶん暖かかった。それでもセーターやコートが大半を占める中で、俺のシャツにゆったりとしたパンツ一枚の格好は浮いていた。

なぜかは知らないが、俺は昔から寒さには強かった。もしかしたら、ただ寒いのが好きなのかも知れない。身を引き締める風は、確かに心地よい物だった。何より動きやすい。

今日やる事は何もない。やりたいことも一つも無い。ただぶらりと街を歩くだけだ。

一体何処から湧いてくるのか、何時も街の道には人が溢れかえっている。自分もその一人に過ぎないと思うと少しは悲しくもなってくる。

アスファルトを踏みしめ、人と人の流れをすり抜けるように歩く。知らず背筋が冷え、なのに手には汗が握られた。予感。いつの間にか、見覚えのある通りに来てしまっている。

しかし、まさかこんな事があるのか。あの夢、あの交差点。確かにあの夢の中で見た交差点へと続く道。ましてや、信号の向こう側にいたのは夢に出てきた女だった。その女だけが、周囲の人の中でぼうつと浮き上がっているようにさえ俺には見えた。

長く、綺麗な黒髪に似合わないスーツ。間違いがなかった。それ以前に、こいつだと、俺の中の何かがそう告げていた。

だから見間違いはない。そんなはずがない。この女は、たぶんこの少し後に轢かれるのだ。そして死ぬ。

自分でもその言葉に驚いて、そこで一瞬俺は止まった。怪訝そうに、迷惑そうに俺を避けて歩いていく人の流れ。

死ぬのだ、あの女は。なぜ？ 車に轢かれて。そんな事は知っている。なぜ、死ぬのだ？ 死にそんな理由はない。例え何かをしていたとしても、何を思っていたようと、そんなものと関係なく襲ってくる。不意に、死がどうしようもなく理不尽な物に思えた。あの病と同じ。理不尽なもの。

女が、例の交差点に向けて道を曲がる。心臓。知るか。気付いたときには、もう脚が動いている。腕が振られ、もう駆けだしていた。本当に車が来るのか、信じてなどいない、到底信じられる筈がない。しかしならばなぜ、俺は走っているのか。

どれぐらいぶりだろう、この足に伝わる衝撃は。体は、ちゃんと走りを覚えているのか。



今更のように気付いて舌打ちをする。俺はなぜ走っているのか。あれは夢だった。ただの変人の婆さんだった。気のせいだったかも知れない。疲れていて、幻覚でも見たのかも知れない。なのになぜ、俺はあの女を追いかけているのか。別に死んでも良いのだ。赤の他人など。この流れと同じ。この流れを作る一つの粒。

なぜそんな物を今さら掬おうというのか。別に助けても良い。手を伸ばして届くならば、差し伸べても良い。だけど届かない。彼女は交差点へ消えた。急がなくては。しかしだから、なぜ急ぐのだ。

心臓が荒い音を立てる。運動。それもこんな激しい運動は禁じられている。他人の死など別に大したことはないのだ。このままでは俺が死んでしまう。また倒れて、動けなくなる。しかしなぜ、この足は止まってくれないのか。走ることなど、もうとづくに忘れたと思っていたのに。

突然流れに逆らうように走り出した俺は、当然、流れに邪魔をされた。しかも最悪、昼時である。ごったがえす町中で、さらにごみごみと流れが入り組んでいる。

体も重い。思うように息も続かない。

なんなのだ。俺はしばし呆然とした。なんなんだ、この体は。これほどまでに、何時から俺はこれほどまでに駄目になったのだ。心臓が嫌な音を立てたときか。違う。あの時はまだ走れた。警告など無視して、走った。その時も、走れた。では何時からだ。こんなにも体が重くなったのは。トラックで倒れて大学を退学させられたときか、陸上の夢を諦めたときか。どれも違う。幾ら倒れようと、幾

ら止められようと、狂おしいほどの衝動が力が血と共に俺の中を這いずり回っていた。

全てを諦めたとき。夢を諦めたとき。

しかし、だったらあのまま走り続けて死んでいれば良かったとでも言うのか。

人にぶつかりそうになる。構わず弾き飛ばした。それでも、自分も蹣跚している。くそ、何時からだ。こんなにも自分が腐ったのは。なぜ、そのことに気づきもしなかった。知らないうちに、あの衝動も何もかも遠い物となっていた。全身に溢れていた力と共に。

「くそ。どけ、邪魔だっ！」

叫ぶ。それだけで、肺が潰れてしまったような気がした。上手く酸素が入ってこない。

どんなだった。あの時の呼吸は。こんなじゃなかった。こんな、無様ではなかった。俺は、常に一位だったのだ。誰も俺の前を走ることとは出来ない。走らせない。世界に俺は一人だった。空気は体を満たし、地上の重力からもしがらみからも解き放たれたのだ。

後ろから怒声が聞こえる。それさえも、もうあやふやだった。

そう、どんな歓声も、罵倒も、俺には無縁だった。そんな事は、知らなかった。ただトラックがある。スタートがあり、ゴールがある。そこを全力で駆け抜ける。相手は誰でもなく、ただ自分。

先頭を走るのに駆け引きなどいらぬ。どこまで最速で、どこまで走り続けられるか。ただただ自分との勝負。単純で、明快で、爽快なレースだった。

陸上トップクラスの公明大にして二年でエースになった男。まるで地上を翔る脚を持った男。

そう呼ばれたのは一体誰であつたか。それを一瞬にして壊したのは、一体何であつたか。心臓が、どくと音を立てる。煮えたぎつた物が、吹き出すように喉の奥から息が漏れる。通りの向こうに女が見えた。のんきに信号を待っている。

なぜか、ちらりと眼があつた気がする。驚いた顔をしていたような気もした。距離が遠すぎて、はっきりとは分からない。姿も、直ぐに人のゴミの中に隠れた。声を上げて、届きはしないだろう。なんと言えれば良いかも分からない。見知らぬ男が、そこで待っていると叫んだところで待つ女などいる筈もないのだ。声を荒げればむしろ慌てて逃げるだろう。

通りに渡る為の信号も赤く、車がひっきりなしに走っている。

間に合わない。待っていたら、間に合わない。それは、一度止まったらもう二度と動かないだろう両足のようにはつきりと感じられた。

自分との勝負。どこまで止まらずに走り続けられるか。人の波を掻き分け、歩道から飛び出す。初めのクラクシオンはやたらと大きかった。次にはクラクシオンさえ鳴らなかった。

駆けていく。心臓はまだばくばくと動いている。足は、重力を振り払うように地面を蹴り続けている。しかし足は進まない。まるで泥沼の中を走っているようでさえある。

幾つものクラクシオンに混じり、怒声が聞こえた。直ぐに、後ろへと去っていく。何を言っている

かは分からない。叫んでいるから、たぶん怒声なのだろう。息が弾む。初めの頃より、むしろそれは軽かった。体は、覚えている。真の所で、まだ覚えている。餓鬼の時分から、ひたすら走り続けてきた。それだけが、俺だった。それを簡単に忘れられるはずがないのだ。忘れて良いはずがない。

いきなり、視界の端に黄色い物が見えた。車。

咄嗟に飛んでいた。ブレーキ音が、やたらと身近で聞こえる。実際、車のボンネットは俺の足の下にあった。思い切り蹴り飛ばして前へ出る。フロントに乗り上げ、そのまま何度かアスファルトで肌を摺りながら転がり、止まったときにはもう前へ走り出していた。ちらりと見えた信号は、もう青になりかけている。絶え間なく鳴り続けていた怒声やクラクションが止み、まるで世界中の時が一瞬止まったように思えた。

痛みはただ痛みにすぎなかった。四肢共に全ての感覚がある。ただ、脳が痺れたようになっていた。縛れそうになる足を、必死に立て直した。

まだ、動いている。心臓は脈々と脳にも足にも血を送り続けている。

渡った先は人の裂け目の中だった。走ると、道が開いていく。囁きは、不思議と怒声よりも深く耳に届いた。

（あの女は……）

探して、舌打ちする。信号を一人渡っていた。まだ完全に青信号にはなっていない。そこを、小走

りに走っている。何をそんなに急いでいるのか。

心音が、ふと消えた気がした。気のせいだ。足は出ている。眼も見えいている。灼熱に体が包まれたようだった。心臓は、やはり動いている。まだ止まるな。あの時のように、あの最後のレースの時のように。肥大した心臓。今動かなくて、これから何時動くというのか。

足を踏み出す。前へ踏み出す。ふいこのように息が漏れる。

喉は出血しているのだろう。微かに血の臭いが交じっている。

もう、満足な声は出ない。直接掴まえるしかない。思ったとき、視界の端に飛び込んできた車。色が、血のように真っ赤だった。

間に合わない。どくと、心臓が一つ鐘（カウント）を鳴らし始める。自分との勝負。まだ、間に合う。昔の俺ならば、あの時の脚があればまだ間に合う。

強烈に願う。それでも、踏み出す一步は弱々しかった。なぜ動かない。ナイフはないのか。あったとしたら、この無様な脚に突き刺してやろうというのに。心臓は、まだ動き続けているというのに。なぜこんなに震えて動かない。

なぜだ！ 車がどんどん女に近づいていく。なぜ間に合わない。女は、気付くどころかそちらを見ようとしないう。

間に合わないのならば、なぜあんな預言を聞いたのだ。救えないというならば、なぜあんな夢を俺

に見せたのだ。女は、俺に助けてとさえ言ったのだ。

ぎゅるりと、心臓が音を変えた。いや、体中の何かが変わった。

脚が、浮く。地面から浮く。地上を翔る男。世界に光が満ちていた。脚が羽根のようになる。すつと、女が近づいた。懐かしい。酷く懐かしい世界。光こそが世界だった。光が、胸に頭にと溢れていた。

女に手が届く。ふと、己の心臓が止まっているのがはつきりと分かった。

女が地面に転がりながら此方を見ている。俺は、ほほえみかけた。赫。次の一瞬、視界の全てが赫で埋まった。抗うもない衝撃だった。空を転がる。伸ばした手が硬い何かに弾かれた。

俺は、飛んでいるのだろうか。幾ら脚を動かしても、空は硬いままだ。

俺はまだ、空を翔け続けているのだろうか。様々なものの中で、様々なものが曖昧になっていく。

だが。最後の最後で、まんざらじゃあなかった。

それだけは確かだ。

……私は、なにを望んだのだろう。その代償に、何を失ったのだろう。

嗅ぎなれた、落ち着けるべき家の匂いさえどこか暗い。フロアリングの埃が舞い上がるのか、感じないはずのカビ臭さがやたらと鼻に触れる。

私はソファアーに腰を沈ませた。手に持った缶ビールは半分を残して既に温くなっている。私はただ、ぐつたりとしながら真っ白い天上を見つめている。

涙も出なかった。思い出そうにも、彼の名前すら知らなかった。それが、今更ながら酷く身に染みっていた。

知人だったら、もっと涙して、もっと後悔して、もっと懺悔しているはずなのに。それさえも出来ないことが、妙に身に染みて、本当に一生取り返しをつかないことをしたのだという感覚が、不思議なほど生々しく胸の内側を掴んで離さない。

「どうだい、自分のために人を犠牲にした気分は？」

しわがれた鈍い声。なのに、嫌になるぐらい頭の中に染み込んでくる声。

私は眉間に皺が寄った感覚を覚え、缶ビールをぶら下げた手でその額を気怠げに覆った。目蓋に影が落ちる。

このまま眠れたらば、どんなに良いことだろう。

「……また、どこから入ってきたのよ」

まさか本当にそうする訳にもいかず、私は声の方に眼を向ける。いつの間に現れたのか、やはり腰の曲がった老婆が突つ立つて私を見下ろしていた。

予言師。初めて会ったとき、たしかそう名乗ったと思う。

しかし今度は何も言わず、予言師は寒そうにベージュのカーディガンを胸元へと引き寄せた。私の眉が意図せずぴくりと動く。老婆の左手の薬指にはめられた指輪が鈍く光を湛えている。ポケットから、懷中時計の銀の鎖が覗いている。この予言師と名乗った怪しげな婆さんがあの懷中時計を取り出すのは、私にとつてもはや恐怖だった。私は、その恐怖に背中を押されるようにして口を開いた。

「私は……、止めようとした」

そう、止めようとしたのだ。何度も何度も来ないでと叫んだ。でも、それでも彼は止まらなかった。そう、私は確かに止めようとしたのだ。なのに彼は止まらなかった。私は、よせと言ったのに。

「貴女は言ったわね。運命は変えられない、けれど騙すことは出来る。私がその日、車に轢かれる運命なら、その時、別の人が代わりに轢かれれば釣り合いは取れる」

「……後悔しているのかい？」

私は頷いた。そうしなければならぬ、と思った。

「じゃあ今までが全てで、突然その前に戻れたとして、お前は良いんだね？ お前の代わりに死んだ男など実はどこにもいなくて、お前は交差点のど真ん中でそれに気付く」



老婆の目が、胡乱げに私を見た。悪寒とも嫌悪ともつかない寒気が、私の背筋を這い昇っていく。

頭が冷える。空を転がる感覚が、圧倒的な物量が、アスファルトに叩きつけられる衝撃が、何度も夢で見せられたそれらが嫌でも甦る。胃の中が引つ繰り返ったような不快感が胸を苦しめる。手の震えを抑えようとして、持っていた缶ビールを潰してしまった。溢れ出した沫が、まるで血のようにべったりと手を汚していく。

「今日寝て、眼が覚めたらあんたは車の前に立ってるんだよ。お前はそのまま轢かれて死ぬ。何処の誰とも知らない男があんたに代わることはなく、元から決まっていた通りお前は死ぬ」

「巫山戯ないで！」

叫んでいた。肩を抱いていた。全身が震えていた。何度も、何度も夢で見せられたあの一瞬の恐怖が全身を支配していた。眼が覚めたとき、これが夢で良かったとその度に思った事を思い出さずにはいられなかった。

そして私は望んだ。見ず知らずの誰と引き替えに、自分が生き長らえることを。そしてそれは成功した。成功、してしまった。しかしまさか、これが夢だったとしたら、それは良いことの筈だ。本当に死ぬべきは私だったのだから。なんとなく分かる。眼が覚めたとき、私は交差点の真ん中であの赤い車が迫り来るのを呆然と見詰めているのだと。

視界が揺れた。足に力が入らない。無様にソファから滑り落ちるのを私は最期の意地でなんとか押

し止めた。

老婆がにやりと笑っている。全て分かっている、そんな笑みだった。決して平坦なだけの人生ではなかったけれど、これほどまでに人を憎いと思ったのは初めてだった。私は、全身の怒りを込めて老婆を睨み付けていた。そうすることしか、自分を抑えられなかった。この苦しみから、少しでも楽になりたかった。

「お前が望んだんだ。自分の変わりに誰かを生け贄にすることを」

私はまだ老婆を睨み付けていた。そうしないと、今度は本当に腰を抜かしてしまいそうだった。もしかすると、失禁さえしてしまうかもしれない。それほどの緊張が蝕み、内臓という内臓がきゅんきゅんと震え怯えている。

あの一瞬の恐怖は、蠟燭の火を吹き消すよりも容易く私の意地や見栄を吹き飛ばすだろう。しかし、しかしそれでも人を犠牲にして生き延びるなど許してはならないのだ。決して、そんなことは許されないのだ。

老婆の笑みが、哀れみのような物に変化した。ぞくりとする不気味さを私は感じ取っていた。

眼を見詰めていられなかった。しかし、眼を逸らすことも出来なかった。

隙を見せたらその瞬間に自分は、交差点で。しかし老婆はゆっくりと目を閉じた。堪えようもない物が、一瞬にして身を包んだ。

ふ、と老婆が言つた。

「過去をなき物にするなんて、たとえ神様がいたつて赦されやしない。あたしに出来るのは未来の、それもほんの僅かな運命を見せてやることだけさ」

そして、不意に老婆の瞳が私を見詰めた。私は一瞬でそれに惹き込まれた。タイトスカートの中で何かが広がっていく。僅かに身動きし、ようやく自分が失禁していることに気がついた。もはや恥はなかった。心の奥底から息が洩れる。恐怖ではなかった。それは安堵だった。

常に私を嘲笑つて憚らなかつた老婆が、重そうに目蓋を閉じた。その表情は見るに堪えかねたと言ふより、同情や哀れみなように思えた。

何かで怪我をしたり落ち込んだりした私を心底思いやり、心配げに様子を窺う里親のようですらあった。

「恐かつたね。だがもう、なにも心配することはない。何もね」

不思議に温かな声だった。私は何も言えなかつた。まだ全身が弛緩したようになっていた。

安堵。これ以上は何もないほどの安堵が全身を襲つていた。嗚咽すら込み上げてくる。

遙か昔に通リ過ぎた筈の泣き方だった。子供が、駄々をこねるような。しかし、それすらもどうでもよかつた。

私は助かつた。死なない。これは夢じゃない。もう絶対にあの時に戻ることは出来ない。どうしようと、

それはもう起こってしまったことだから。だから、私にもう命の危険はない。あの車は、もう本当に、今度こそ走り去ったのだ。

「だが、あの男には済まないことをした」

老婆の声が、僅かに耳に届いた。私は、ただ泣き続けた。

「ごめんなさい。本当に、本当にごめんなさい」

私は泣き続けた。初めて、やっと初めて、私は彼に謝れたような気がした。名も知らぬ彼。そうするほかに、何が出来るのか。

「あの男ならもしやと、思ったのだけれど」

私はただ、泣き続けることしかできなかった。



## ・編集後記

本書は試験用の Adobe InDesign CS3 を用いた DTP の試作第一号（古書を含めれば第二号）である。現在は道具も紙もインクも不足しているので現物を製作したことはないが、トンボや裁ち落としも含み四六判での印刷に対応している筈である（見栄えのため、この Version には表示していない）。

主に一太郎で製作した以前の古書に比べ、表紙の作成から PDF への変換まで比べものにならないほど効率的に作成する事が出来た。肝心の出来も古書より安定していると云う。

In Design CS3 の機能を殆ど使用していない現在においてのこの結果は、私に非常に可能性を感じさせるものとなった。

惜しむらくは定価で十万弱もする値段であるが、無理して用意できない値段でもないだろう。ともあれ、試用期間はあと二十九日間ある。その間、一般的な書籍のデザイン以外に雑誌的な印刷も試してみたいと思っている。

なお、それが主目的ではないため、使用される文書（小説の場合）は従来の再録によるものが多くなる予定である（ただし、その間の HP の更新は停止しない）。

将来的には（現物印刷も含めるが）主に電子出版に挑戦していきたいと思っている。その為、読み辛かった点やその他、気になった点があれば何でも掲示板に書き込んで頂きたい。

その代わりにはないが、お応えできるご要望には応えていきたいと考えている。

# 青鳥文庫 1

柳 隆盛

---

平成二十年十月十九日 初版発行

著者 柳隆盛

発行者 柳隆盛

発行所 八柳書房

U R L : <http://bakarudhi.futene.net/>

---

始